

## 第 60 回 歴史リレー講座「王権誕生—この国のかたちはいつどのように生まれたか—」寺澤 薫氏 (R1.9.15)

歴史学研究で成果を上げるには考古学や民俗学の成果は必須で、なかでも発掘された物の分析には自然科学の助けが不可欠です。また、現代における歴史学の役割は事実の解明だけでは不十分で、現代社会の課題解決に結びつける役割も求められます。私どもの提唱する「纏向学」とはそうした学際的な研究を目指しています。

日本国の誕生については「飛鳥時代 7 世紀頃」が定説とされています。しかし、聖徳太子の時代にすでに「倭」という名の国家が存在したのはご承知の通りです。倭国は卑弥呼の時代、さらに 2 世紀にまで遡ることができます。中国の史書『後漢書』には「107 年に倭国王帥升すいしょうが後漢王朝に朝貢した」とあります。国家をどう定義するかによってその成立時期は違ってきますが、私は外的国家という視点を重視してこの国が生まれたのは遙か紀元前だと考えています。今日はこの国の起源を考えると、纏向遺跡や山の辺、桜井などの地域を絶対に無視できないことをお話します。

3 世紀初めの纏向遺跡はヤマト王権最初の王宮が造られた場所です。1 世紀頃にはすでにナ国（現在の福岡市）などの部族的国家（初期の国家）が北九州で続々と誕生していました。

107 年、帥升が中国を訪れた時点でイト国は倭国へと進化していました。イト国の場所は今の福岡県糸島市にあります。当時のイト国を盟主とする倭国王の権力範囲は九州北部と四国西部まで及び、配下の証として銅矛（祭事用）が与えられました。ところが、3 世紀になると後漢の後押しで倭国を治めていたイト国は後漢の崩壊とともに勢力を失い、倭国は混乱を極めます。しかも、後漢の凋落と相反するように勢いを増してきた公孫氏（三国時代の氏族）は魏や呉との勢力関係で倭と韓との関係を作ろうと画策してきます。世の中は閉塞感に満ち、政治的経済的な停滞を打ち破る必要がありましたが、イト国だけでなく、どこかの国が他を制圧するという状況はできませんでした。そこで、西日本の各国が納得できる大胆な打開策が検討されます。卑弥呼共立という事態はこうして起こった政治談合です。卑弥呼という女性を倭国王に祭り上げたのが「イト」倭国に替わる新生倭国の誕生であり、ヤマト王権のはじまりなのです。

纏向の都は 3 世紀の初めに突如出現し、70~80 年後に消滅しました。周囲に造られた巨大な運河は農業用水路ではなく、纏向川と各地域をつなぐ物資搬入用とみられます。その証拠に遺跡からは九州、瀬戸内海沿岸、山陰から関東などから運ばれた多種多様な土器が大量に出土しています。纏向は政治的経済的な役割を持つ大きな市いちでした。現代に例えれば、全国の東京事務社が建ち並ぶ東京霞が関に相当すると言えばわかりやすいでしょう。そこには各地から住みついた位の高い人々も含まれていたはずで

その纏向で生まれた前方後円墳はヤマト王権祭祀の象徴であり、傘下となった各地の王のシンボルでした。その前方後円墳の要素を一つずつ見ていくと、王権を作った勢力の強弱が見えてきます。第 1 にはやはりかつてのイト倭国青陵、そして第 2 は新興勢力である吉備を中心とする瀬戸内海の力です。ヤマトや近畿の力は中心には入っていません。

また、2009 年には同遺跡から東西一直線に並ぶ巨大な建物群跡（大王宮）が出土しています。『魏志倭人伝』の記載では、卑弥呼王権の地はかつての都、イト国を凌ぐ政治権力を持っていたはずで

そのような国は九州には存在しません。これだけの根拠が揃えば、纏向遺跡にヤマト王権最初の大王宮があったことは確実ですし、新生倭国 = 卑弥呼の政権 = ヤマト王権 = 纏向の都と言うことになります。ただ、ここで重要なのは、『魏志倭人伝』に卑弥呼が邪馬台国の女王だという記述が見当たらないことです。卑弥呼は「倭国の女王」「倭王」と書かれています。ヤマト王権の中核である纏向は確かに邪馬台国（ヤマト国）の中にありましたが、邪馬台国の王都といった狭いものではありません。倭国の王都なのです。そしてさらに重要なことは、纏向遺跡の誕生が、この国が部族的国家から王国という段階に達したことを示したことです。纏向遺跡出現の重要性はその後の律令国家の成立に向かう王国の出発点だということなのです。